博士論文 概要書

（アルゼンチンカトリック教会の変容）

（－国家宗教から公共宗教へ－）

(The Transformation of the Argentine Catholic Church)

（－From State Religion into Public Religion－）

早稲田大学大学院社会科学研究科

地球社会論専攻ラテンアメリカ地域研究

（渡部奈々）

近代化のプロセスにより宗教は次第に私事化され、公的領域における政治社会的影響力は減退するという世俗化のテーゼは、1980 年代に世界各地で起こった「宗教の復興」とも呼ばれる宗教現象により、その妥当性が問われるようになった。今日広く共有されている理解は、現代社会が単に世俗化した社会ではなく、信教自由の保障および国家と宗教の制度的分離という点での世俗的でありながらも、諸宗教が公的領域で一定の影響力を有する社会というものである。『近代世界の公共宗教』の中で、カサノヴァはこれを宗教の「脱私事化」と呼び、脱私事化した宗教を公共宗教と規定した。

本研究の目的は、アルゼンチンカトリック教会の公共宗教としての特徴を明らかにすることである。アルゼンチンカトリック教会内には、ヒエラルキーに基づいた既存の「組織教会」と、革新派司祭を中心に構成される「民の教会」がある。すなわち、国家宗教から公共宗教に変容した組織教会と、左翼的政治運動から社会支援活動へと理念実践の形態を変えた民の教会という二つの潮流があり、それぞれが異なる公共的役割を果たしている。本研究では、その変容過程を実証的に分析し、アルゼンチンカトリック教会の公共宗教性を多面的かつ統合的に理解することを目指す。

1 章では、宗教の公共的役割に関する議論として、カサノヴァの公共宗教論、ロールズの政治的リベラリズム論、ハーバーマスのポスト世俗社会論を取り上げ、公共宗教とは何か―その存立条件と期待される役割―を考察し、本研究で用いる分析枠組みを提示する。後半では、先行研究として公共宗教研究、宗教の社会貢献に関する研究、宗教のソーシャル・キャピタル研究を取り上げ、本研究における位置づけと課題を明らかにする。2 章では、カトリック教会のユニバーサルな歴史を概観し、教会が国家宗教から公共宗教へと変容していく「現代化」の過程を考察する。そして後半では、アルゼンチン独立から 1983 年の民政移管まで約 1 世紀半に及ぶ歴史を通して、組織教会が国家宗教としてどのように教会権力を保持してきたのかを明らかにする。3 章では、民の教会の事例として 1960 年代後半の「第三世界のための司祭運動」を取り上げ、革新派司祭たちがいかにして第二バチカン公会議の理念を具現化しようとしたか、そしてその試みがなぜ失敗したのかを検討し、彼ら民の教会が公共宗教になりえなかった理由を明らかにする。4 章では、1983 年の民政移管以降のアルゼンチンに焦点を当てて、組織教会と民の教会がどのようにして公共宗教へと変容していったのかを考察する。民主化によって国家宗教としての権力を失った組織教会は、2001 年経済危機の際に行われた「アルゼンチンの対話」を契機に、倫理的権威者として新たな公共的役割を担うようになった。カサノヴァの提起した公共宗教論に照らしながら、水平的討議モデルと「対話」の違いを明らかにし、組織教会の公共宗教としての特異性を考察する。後半では、民の教会の事例として、市民組織マドレ・ティエラと「スラムのための司祭グループ」による社会支援活動を取り上げ、その公共宗教性が「第三世界のための司祭運動」とどのように異なっているのかを考察する。5 章では、ソーシャル・キャピタルと宗教の関係を明らかしたうえで、アルゼンチン大ブエノスアイレス圏のモレノ市で行った調査に基づき、草の根レベルにおける民の教会の公共的役割をソーシャル・キャピタルの視点から考察する。後半では、1980 年代以降アルゼンチンで拡大するペンテコステ派教会を取り上げ、その特色やカトリシズムとの差異を検討する。6 章では、これまでの議論を総合して、組織教会の公共性

と民の教会の公共宗教性について述べ、アルゼンチン社会におけるカトリック教会の公共的役割の特異性と限界を指摘することで、本論文の結論としたい。